Vincent Van Duysen × PALAZZO MOLTENI TOKYO

ブランドとデザイナーの感性を重ねた邸宅

素材がもつ魅力を引き出し、建築とインテリアが融合した空間を生み出す建築家、Vincent Van Duysen(ヴィンセント・ヴァン・ドゥイセン)。2025年、イタリア・Molteni&C(モルテーニ&チー)の旗艦店を東京・南青山に設計した。邸宅をイメージしたその空間で、彼の美学に触れたい。

Photographs : Nacása & Partners (特記以外)　**Text** : Taeko Ishii

自然由来の色と光沢がもたらす落ち着きと洗練

3階にはVan Duysenの名を冠したキッチン「VVD」をレイアウト。壁は柔らかな色のサンライズオーク材突き板、カウンターの天板はグレーのトラバーチンと広い面積に自然素材を用いて安らぎを演出。家具もダイニングのソファ「PAUL」やリビングのソファ「AUGUSTO」を始め、ベージュとグレーを基調に色を調和させた。収納や照明のガラスの艶(つや)がアクセントに。

“駆け出しのころから大切にしているのは、自然界に存在する色を使うこと”

2025年5月にオープンしたイタリアの家具ブランド、モルテーニ&チー(以下モルテーニ)の旗艦店「パラッツォ・モルテーニ東京」。同ブランドのクリエーティブディレクターであるベルギーの建築家、ヴィンセント・ヴァン・ドゥイセンが日本で初めて手掛けた建築だ。邸宅をイメージした4フロアは「ゲストをもてなす場」「プライベートな空間」などそれぞれテーマを設け、家具やキッチンを美しくレイアウトしている。

日本の文化に着想を得た建築

これまで各国でモルテーニのショールームを手掛けてきたヴァン・ドゥイセンは、常にその国の文化と対話してデザインを生み出してきた。ブランドのチーフマーケティングオフィサーであるジュリア・モルテーニは「彼は各国の文化に寄り沿いながら、モルテーニのDNAをぶれずに表現する」と信頼を寄せる。

ここ東京では、建築のフォルムに日本の美意識を投影。グリッド状の窓、メタルの水平ラインで構成した幾何学的なファサードは、桂離宮に着想を得ている。各フロアには日本の中間領域をヒントにテラスを配し、量感がある壁と窓やテラスといった“空白”を対比させた。

「白やベージュについて、私はかなりうるさい」と笑う彼が外壁に選んだのは、漆喰(しっくい)を思わせる左官材仕上げの特注色「ボーンカラー」。ベルギーの自宅でも基本カラーに用いた愛着ある色だ。グレー

ベルギーの建築家、Vincent Van Duysenが設計を手掛けた「PALAZZO MOLTENI TOKYO」は、彼がクリエーティブディレクターを務めるイタリアの家具ブランド、Molteni&Cの旗艦店。全4フロアから成り、最上階は約180㎡を居住空間に見立てた「Molteni&C Apartment by Vincent Van Duysen」

Vincent Van Duysen

1962年・ベルギー生まれ。サンルカス建築大学建築学科卒業後、'86〜'89年、イタリア・ミラノとベルギー・ブリュッセルで活動。'90年・ベルギー・アントワープに自身のスタジオを開設し、建築とインテリアデザインに主軸を置く。2016年〜、イタリア・Molteni&Cのクリエーティブディレクター。建築学の視野を取り入れて家具とインテリアアイテムをデザインし、インテリアと建築の関係を熟考し表現する。

“自然の色と素材で構成した住まいには、
住む人たちが色をもち込むだろう。
本やアートは生活の一部である”

**アートが個性を表現する
タイムレスなしつらえ**

3階のリビング。自然の色を基調としたインテリアは、アートやオブジェなど住み手の個性を引き立てる。壁のアートをアイキャッチに、壁面収納「505 UP」もディスプレイを兼ねる。イタリアの建築家、Gio Pontiによる1951年発表のアームチェア「D.151.4」とVan Duysenによる2023年発表のソファ「AUGUSTO」を合わせたタイムレスなしつらえ。

上／3階のプライベートエリアからリビングを介してキッチンまで見通す。右手のスタディスペースの壁はMolteni&Cの装飾壁「ARIAL」。ベージュのファブリック仕様を選び、柔らかな陰影を演出した
下／3階の主寝室の窓辺にはくつろぎのスペースを。壁の塗装やリネンのカーテン、ボリュームのある脚部とグロッシーなラッカー塗装仕上げの天板が存在感を放つテーブル「MATEO」など異素材を組み合わせつつ、安らげるベージュで統一

がにじんだようなほのかなベージュは象牙を思わせ、都心にあってプリミティブな印象をもたらしている。

暮らしの舞台となるインテリア

「私たちはトレンドに重要性を見いださず、時代に捉われないエレガンスを目指す」とジュリア。生活こそ住まいの核と考え、家具単体の美しさだけでなく、モダンで調和のとれた空間を提案する。2024年に内装材が初めてコレクションに加わったのも、そんな理念の表れだ。

設計にあたり、配置する家具やキッチン、システム収納の仕様はブランドとヴァン・ドゥイセンが話し合い決定した。家具が不定期で変わるショールームでは、多様な色と質感になじむ空間が求められる。色を絞りつつ表情豊かに仕上げたインテリアの秘訣を彼に聞くと「大切にしたのは自然界に存在する色、素材を使うこと。自然素材を使った家具や暖炉、タペストリーなどは空間に調和し、互いに引き立て合う」と話した。

自然の色で構成した空間は暮らしのキャンバスとなり、住み手がアートや食器、照明といった独自の〝色〟をもち込むことで初めて、住まいとして完成する。「装飾ではなく、生活の一部として愛でる存在がおのずと生まれる環境が大切」と彼が語るように、素材を生かしたシンプルな空間には多様な色と質感を受け止める余白があること、愛着ある物で住まいを彩る喜びを、この場所は伝えている。

The Language of Materials

白とベージュで構成した主寝室は、ベッド「OVIDIO」のヘッドボードに光沢のあるレザーを使用。ベッドリネンのファブリックの面積が大きい寝室に艶のある異素材をミックスしてアクセントとした

キッチン「VVD」は温もりあるサンライズオーク材の面材に対し、天板と前面の壁にグレーのトラバーチンを使用。光に照らされてアイキャッチとなる有機的な石目は横方向に貼り、変化をつけた

建物1階奥は、少人数のゲストをもてなすキッチン「HI-LINE6」とテーブル「ARC」を囲むダイニング。高さに変化をつけたペンダントライトで上方向に動きをもたらした。ガラスのシェードの艶がアイキャッチに

主寝室の隣はVan Duysenデザインによるバスルーム。トラバーチンとサンライズオーク材の組み合わせは同フロアのキッチンと共通。扉はハンドルレスで直線美を際立たせ、建築の延長のように見せた

テラコッタカラーが存在感を放つワンルーム

ゲストを迎える場をイメージした1階のリビング&ダイニング。トレンドである彩度の高いテラコッタカラーを、奥のソファ「LUCIO」の張り地や手前のソファ「AUGUSTO」のグログランパイピング、正面奥のダイニングの壁に飾った銅板のアートなど随所に取り入れることで視線をさまざまな方向へ導き、空間の奥行きを演出している。

1階リビングからキッチンを見る。パネル状の壁と扉は「ARIAL」のコーヒーオーク色。閉じると一枚の壁に見える一方、幅802㎜のパネルの境界に金属を配してさりげなくリズムを生んだ。幅木のないパネル状の内装材は黒子の役割を果たしつつ、深みのある色と木目が空間を質感高く彩る

“幾何学的な造形に加え、
質量のある壁と吹き抜けの空気感、
穴としての窓やガラスとのメリハリは
日本的な要素だ”

桂離宮への敬意を表した彫刻的なフォルム

質量を感じるマッシブな印象の外観。グリッド状の窓、水平ラインを描く黒いメタルなど幾何学的なデザインは日本の桂離宮へのオマージュだ。外壁は漆喰（しっくい）を思わせる左官材仕上げで、Van Duysenが愛するボーンカラー（象牙調の白）を特注色で実現した。ボリュームのある壁と窓やテラスの空白の対比によって、彫刻的な佇まいに。以上2点Photo by Molteni&C

〈問い合わせ〉
PALAZZO MOLTENI TOKYO
東京都港区南青山5-16-10
TEL.03-3400-3322
営業時間／11：00〜18：00　予約制　水曜・祝日休
URL：https://www.molteni.it/store/tokyo-flagship-store/jp

シーンに応じて間仕切る大広間

地下1階はイタリアの邸宅に見られる「SALA GRANDE（大広間）」の陽気な雰囲気をイメージし、大人数をもてなす場に。ソファ「OCTAVE」はゲストが集い語らうスペースとなるよう、緩やかに角度をつけた。正面の「RATIO」を始め使い方の異なる三つのキッチンを備え、シーンに応じて引き戸や扉で区切れるようにしている。

下右／地下の大広間からドアを隔てた先には、対照的にコンパクトで親密感のあるリビングを。ラグでゾーニングしてソファ「ALBERT」を配した左手にはドライエリアが見え、屋外と一体に感じられる
下左／地下1階のドライエリア。直線的な建築と植物の生命力の対比、壁に囲まれた空間を庭とするアイデアは、日本庭園や寺社から発想した。マツやモミジなど和の趣をもつ植物を選んでいる。床には、経年変化したかのような表情のイタリア産レンガを敷いた